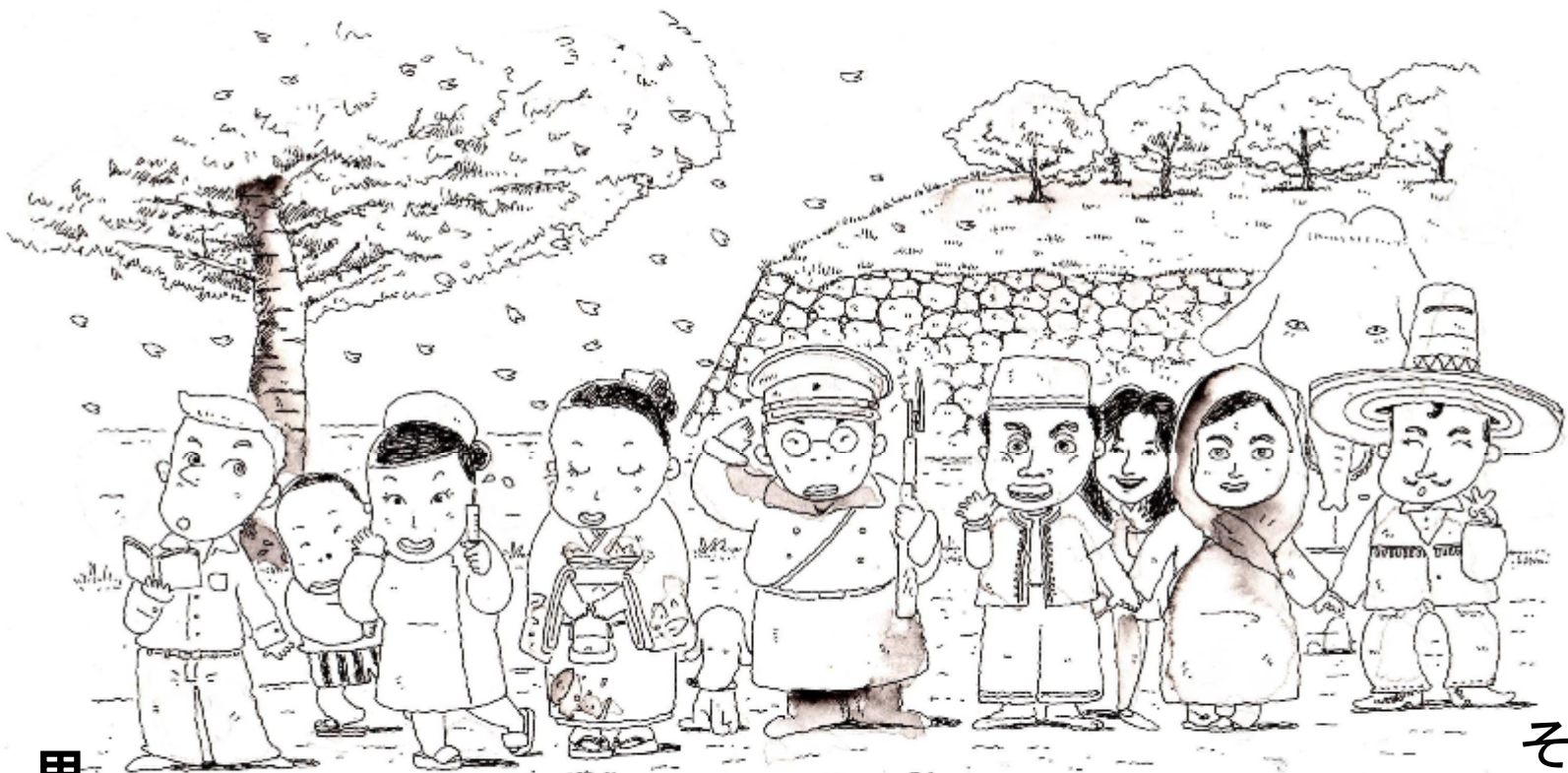


おじさんの青春日記



その
13

寒中お見舞い申し上げます。

自然の摂理どおり巡り来る春の到来に感謝し、あらためまして旧年中の厚誼に厚くお礼申し上げます。

後世の歴史に記されるところと思われる、世界経済の異変のなかで新しい春を迎えました。その対応に追われるままに、形而上の思いや書物をひもとく余裕すらなく年末の除夜の鐘を聴くことになりました。

毎年お正月に、という読者の皆さまとのお約束が果たせなかったことを、深くお詫び申し上げます。

私は父親の代から愚直に「ものづくり」の事業に取り組んできました。

ここ長きにわたって世界的規模で続いた風潮、実体は危うい砂上に築かれ、社会の利便や人間社会への貢献も不明、資金の往来だけで巨額の利益を獲得する詐欺まがいの金融ビジネスが、私には到底理解を超えたものに映ります。

そこには、智慧を絞って作物や機具を作り、顧客との信頼関係のもとに商品やサービスのやりとりをして、喜びや冥利を味わう「働く人の姿」をどうしても見出すことが出来ません。

一昨年、それまで二年間務めた農林水産大臣の諮問機関「食料・農業・農村政策審議会」審議委員の任期を満了いたしました。

日常の仕事とは異種の公務に戸惑う私に、各地の事情を始めとした専門的で広範な知識を伝授して下さいました、多くのご関係者の皆様にあらためてこの誌面を借りて心から厚くお礼申し上げます。

「食料・農業・農村政策審議会」は、政府が国民の食料確保や農業の振興政策を遂行するにあたって、その基本法である「食料・農業・農村基本法」第三十九条に基づいて設置されています。農林水産大臣ほか関係国務大臣の諮問に依りて、国の食糧政策をはじめとする、農業政策全般を調査、審議する法定審議会です。

各種ある政府の審議会はその形骸化を問われることがしばしばです。しかし事実上、国策を立案し実行する立場にある、中央省庁の幹部公

務員と民間人とが直接議論を交わし、市井（しせい）の生の声を伝える法律上のすべは他にないのが実情です。

巨大な権力を背景にする為政者が、独断によって多くの誤謬（ごびゅう）を冒すことがあることは、あらためて言うまでもありません。

現代日本の農業経済分野における第一人者、八木宏典東京大学大学院教授を審議委員会長に、審議委員の定数は二十名。ほぼ半数を占める学者の他に、ジャーナリスト、経済団体首脳、消費者団体指導者、全国農協組織代表者、労働組合代表者ほかの民間委員が毎回、東京での合同会議や各種部会に席を連ねます。

八木会長は専門学者としての豊富な見識に加え、一学徒のように謙虚で温和なお人柄。委員全員が一同に会する合同会議や企画部会には、事務次官を筆頭とする農林水産省各部署の主要幹部に加えて、政策に関連する他省庁の代表者も陪席して委員との議論に加わります。

八木会長は平素の温厚な人柄とは一変して、議長としての議事進行にあたっては威厳をもって論点をまとめ、委員たちと並み居る官僚連との議論を支配します。

委員のひとり、東京大学大学院・吉川洋教授（経済学）は、もの静かな語調から繰り出す明快で斬新な視点から、シニカル（皮肉、冷笑的）に官僚連の政策や答弁の矛盾をついて、議論を白熱させることがしばしばでした。

吉川委員は、

「一九五五年（昭和三十年）頃からおよそ二十年にわたって続いた、農村部から都市圏への農村青年たちの大規模な『集団就職』が、戦後の日本の高度経済成長を支える一方で、この大移動がのちの農村の加速度的な荒廃を招いた」

という趣旨の著述を残しています。ちなみに一九六一年当時の日本の食料自給率は八十%をゆうに超えており、現在は先進諸国のなかで最低水準、このたび辛うじて四十%を回復したのが実情です。

二年間の議論のなかで、私が一貫して陳述した意見は、「都市と農村の共生と対流」にかかわる政策。田植えも稲刈りも経験したことのない都会育ちの私ですが、たとえば人口約百二十万人の広島市の域内食料自給率は約三%。この事実は一たび変事が発生すれば、広島市民の九七%がたちまち明日の食に困窮することを意味しています。

このことが決して誇張ではなく実際に起こりうることを、私は「阪神淡路大震災」直後の神戸の街で体験しました。（おじさんの青春日記

その四 「ふるさと」(詳述)

都市は農村の恩恵に依存する「食糧の大消費地」であると同時に、さまざまな分野の優れた人材やテクノロジ、企業、団体、資本などの資源を豊富に埋蔵しています。これら都市が持つ資源を、衰退の一途をたどる農村と有機的に対流させる仕組みを創出できないか。そして、街と村とが活発に往来し、共に協働しあう手法はないか。また、その現実的な実現手段として、中小・零細企業への経営支援や、産業の振興に膨大なノウハウの蓄積と人材、組織をもつ、経済産業省の組織を総動員すべき、というのが私の提言の主旨でした。「食糧の自給無くして真の独立国家とはいえない」という私の思いが根底に強くありました。

たまたまこのテーマはかねてから政府の重要課題であったこともあって、縦割り行政の障壁を超えて、農林水産省、経済産業省による共同法律案「農・商工等連携促進法」として国会を通過し、ただちに施行されたのは昨年、二〇〇八年(平成二十年)七月のことです。

またこれら官製の政策によらず、農村有志の危機感と熱意によって、各地で大小の「産地直売市」などが次々に開業され、多くの都市住民を誘引し、新鮮な農作物を安価に販売して店舗経営が軌道に乗りつつあることは嬉しいかぎりです。元始、先人たちは「物々交換」という手法で互いに持ち合うものを交換し、その日の暮らしの糧(かて)としていたのです。

審議委員の活動とは別に、中央官僚の皆さんと膝突きあわせて論議する機会を何度も持つことが出来ました。事あるごとにマスコミの批判的となることの多い公務員ですが、地方の農村を視察に訪れて、猛雨のなか、傘もささず髪ふり乱して作物の実りを手にとって見ようとすると、二十代の女性キャリア官僚の姿。深夜零時を過ぎても煌々と明かりの点く電ケ関の一室で、政策議論にふける若手官僚達の姿をこの眼で見届けることが出来ました。これらの体験は、将来にかすかな希望を抱かせると同時に、私にとって平素の「食」にかかわる仕事の上で、得難い勉強をさせて頂いた思いです。報酬を得て市民の百年の利福を実現するための業務に傾注する職業は、公務員において他ありません。ひるむことなく最善を尽くしてほしいものと願っています。

経済の急速な収縮や、バブル金融の崩壊が世界共有の切実な課題となりつつある今こそ、立ちほだかるすべての既存の概念や価値観を再検証する、そして行動に移す、絶好の機会が到来しているのかもしれない。

このことは私の息子達はもちろん、次代を切り拓くすべての青年たちに特に伝えたいことからでもあります。

かつて、社会の幾多の閉塞状態を打破するきっかけとなったのは、無名の青年達でした。現代の青年達から「ウザイ」と言われることは覚悟で、まず身近かなことから行動を起こすよう若者を扇動したいと思っています。

もちろん、おじさん、おばさん有志も、評論やブログのつぶやきはやめて、志ある人達とともに、「実行者」として行動に起こすことを呼びかけたいと思います。

人生は一度きり。ぜひ一緒に青年期のあの昂揚の世代に立ち戻って、豊かな経験に裏うちされた「おじさん、おばさん革命」を。

今年の「おじさんの青春日記」は、われわれ日本人の精神の精華ともいえる「さくら」を題材にお届けいたします。

今年も敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々に「おじさんの青春日記 その13」をお届け出来たことを感謝いたします。

上梓の遅れを重ねてお詫び申し上げます。

皆さまのご健康をお祈り申し上げます。

二 九年（平成二十一年） 早春

里吉賢司

おじさんの青春日記

その
13

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、
世界じゅうの孤独なおじさん、おばさんに捧げる。

著者

里吉賢司

イラスト

栗原俊幸

「おじさんの青春日記」ホームページ
ホームページの「作品集」をご覧の方は画面ではなく、
ぜひプリントアウト（印刷）してお読みいただけます
よろしく願います。

www.urban.ne.jp/home/ojisan

57 ~ 54

わくら

(一) 千鳥ヶ淵

東京都千代田区一番町(旧・東京市麹町周辺)。半蔵門から皇居の深い森を右手に見ながら濠伝いに九段方面にしばらく歩くと、歩道を狭めるような桜の古木が立ち並ぶ「千鳥ヶ淵公園」に思わず足を誘い込まれてしまいます。堀の端に築かれた石積みまでの幅わずか三十メートルほど、長さは一キロにも満たない細長い小さな緑地帯。堀に沿っていつの間にか自然に出来てしまったようなたたずまいの公園です。

三月下旬から四月にかけて、ここ千鳥ヶ淵周辺の桜が一斉に開花の時間を迎えます。

染井吉野や山桜、およそ三百本の桜が、舗装もなく土のままの短い小径を、両側からこぼれるような桜花の枝で覆(おお)い尽くします。

花の散り時を迎えると、わずかな風に乗って無数の花びらが皇居を囲む濠の緑の水面(みなも)めがけて舞いながら落ちていきます。

十代の頃から日本現代史、とりわけ太平洋戦争を境とした戦前・戦後史や、その後の日本国憲法制定にいたる過程に興味を持ち続けてきた私にとって、ここ千鳥ヶ淵周辺は私の聖地でもあります。

この千鳥ヶ淵を中心に、半径わずか三キロ以内の狭い区域内で、明治維新はもとより、太平洋戦争前・戦中・戦後の日本の命運を決する、ほとんどの重大事件が発生しました。そして昔も今も、日本の行く末を左右する、重要国策のすべてといえる決定がこの区域の内になされています。



一九三六年（昭和十一年）二月二六日、雪の早朝。昭和天皇の側近による腐敗した側近政治を排除し、天皇みずからが君臨し、統治する「昭和維新」を求める陸軍青年将校たちに率いられた兵士連、約千五百名によるクーデター未遂事件、「二・二六事件」の主舞台となったのも、千鳥ヶ淵を含む、ここからごく至近の一帯であった。

一九二九年（昭和四年）十月二四日、アメリカ合衆国・ニューヨークの株式市場での株式大暴落に始まった世界恐慌は、アメリカのみならず、日本のほか世界中の国々に甚大な経済被害を及ぼした。

第一次世界大戦後、豊富に供給されるアメリカからの資金によって辛うじて支えられていた敗戦国ドイツや、戦争の痛手から回復し得ないでいるヨーロッパ諸国、農産物など一次産品の輸出以外に外貨獲得のすべを持たない経済後進国など、いずれもがアメリカからの豊富な対外投資を立国の支えとしていたのである。

アメリカの金融恐慌によって各国の経済状態は不安定さを増し、連鎖的に世界じゅうに恐慌の波が押し寄せていった。

一九三一年（昭和六年）九月のオーストリア中央銀行の破綻をきっかけとしたヨーロッパの金融恐慌によって、世界的規模の恐慌は決定的なものとなり、その経済損耗は一九三三年（昭和八年）頃まで長く続くこととなる。

当時、日本の対米輸出の中心であり、外貨獲得の主役であった生糸（絹糸）輸出の破綻や米価の暴落とあいまって、日本各地の都市、農村は不況の淵へ追いやられた。都市部にあつては物価の下落（デフレ）と需要の後退から、鉱工業生産が大幅な減少を余儀なくされ、失業者が町にあふれる世情暗然とした状況にたちいたった。

都市住民と農山村民との間の大きな所得格差、政党政治の背後で暗躍する三井・三菱などの財閥系大企業と、零細な商店、工場などとの収益格差は、容易に埋めがたい状況となつて日本の実体経済に表れた。

とりわけ、東北地方の農村では冷害による凶作も続き、借金に苦しむ農民達のなかには娘の身売りや夜逃げが各地で頻発していた。

山形県のある村では、十五歳から二四歳までの若い娘、四百六十七名のうち百十名が、芸妓や娼婦への「身売り」という形で村を離れたという記録が残っている。日々の食料も稗（ひえ）や粟（あわ）に恵まれた者はまだ幸運であり、普段は牛馬の餌となる「ふすま」（小麦の皮カス）さえ口に来ない、「全村民の餓死」寸前の様相を呈していた。

「二・二六事件」で決起した、日本陸軍近衛歩兵第三連隊、歩兵第一連隊、歩兵第三連隊、野戦重砲兵第七連隊など総数千四百余名の兵士のうち、その大多数はこうした悲劇の続く農山村からの応召兵であった。

「昭和維新」の決起部隊は赤坂・山王ホテルを本拠に、皇居をとりまく警視庁、電ケ関の主要官庁、総理大臣官邸、陸軍省、陸軍大臣官邸、朝日新聞社などの施設をほぼ同時に襲撃して占拠。三宅坂、半蔵門、麹町周辺など皇居を望見する主要箇所を武力で制圧した。

また、決起と同時に青年將校達は、財閥企業や満州への野心家などと結託して天皇を操り、日本の政治を壟断(ろうだん)する「君側の奸(くんそくのかん)」として、内閣総理大臣をはじめとする政府、軍部高官達を次々に襲ったのである。

奇跡的に難を逃れた岡田啓介内閣総理大臣や牧野伸顯元内大臣らを除いて、高橋是清大蔵大臣、斉藤實内大臣、渡辺錠太郎陸軍教育總監のほかに、警護の警官、憲兵らを次々に殺害、鈴木貫太郎侍従長らに瀕死の重傷を負わせた。

しかし、「昭和維新軍」の青年將校達の熱望は、最後まで天皇に受け容れられることはなく、逆に長年にわたって忠臣と恃(たの)む重臣達を一朝にして惨殺された天皇の逆鱗にふれて、青年將校達は決起の翌日には「叛乱軍」と断じられる結末となる。

天皇の嚴命で戒嚴令が布かれ、首都周辺から結集した圧倒的な数の制圧部隊によって決起の軍は鎮圧された。指導者の將校、下士官達は逮捕、多数の兵士達は、落涙、失意のうちに銃を捨てて三々五々、原隊に帰順することになった。

青年將校達の決起は長年蓄え続けた革命の熱情に比べ、余りにも杜撰(ずさん)で稚拙、かつ計画性を欠くものであった。またこの事件の背景には終始、当時、陸軍上層部を二分していた「皇道派」と「統制派」、二つの派閥抗争が大きく投影していた。事件発生後、その收拾に狼狽する陸軍上層部の將軍達や、天皇の傍近くに勤める側近達の醜態は、後世の多くの歴史家から辛らつな批判を受けている。

事件前、そして事件直後には青年將校達を「維新の英雄」ともてはやし、称揚したにもかかわらず、事件発生後、高官達はひとたび状況が変わるやいなや、「われは一切関与せず」とわが身の保身と弁明に汲々としたのである。現代日本の組織にも共通する、人間の不純をここにも垣間

見る思いがする。

事件後二ヶ月後に開かれた非公開かつ弁護人も無し、しかも一審判決で確定という陸軍軍法会議は、公判開始後わずか二ヶ月余という異常といえる短期日で最終結審した。

決起の青年将校、および決起を支援したとされる民間人ら十七名に死刑が言い渡される。

この事件の事実上のリーダーとされる青年将校、磯部浅一陸軍一等主計(大尉相当。以下、大尉と呼称)(三二歳)は事件から一年半にわたる取調べ、拘束ののち、彼らの思想的指導者とされる北一輝、西田税らとともに銃殺刑に処せられた。



磯部浅一大尉は山口県大津郡菱海村(現・山口県長門市油谷町)に生まれた。幼少の頃の磯部浅一は、小学生時代の一学年から卒業の六年間までの六年間、修身、国語、算術など十一の学科すべてを「甲」(最優秀)で通した俊英であった。磯部の幼少時代を共に過ごした友人は、磯部の人柄についてこう言い残している。

「浅一は頑丈な体の元気で、激しい気性の男でした。遊びでも大将でしたが、どちらかといえば無口で優しくかったですよ。大人の無理や非道、理不尽なやり方には強い反抗をしても、自分よりも弱い者をいじめようなことは決してしなかった」(『二・二六事件青春群像』書)

現・長門市油谷町は今も鄙びた半農半漁の町である。山陰本線に沿ってなだらかな丘をつくる農地が広がり、すぐ北には黒々と波打つ日本海が一望できる。町に住む人々は純朴で、自然に溶け込むようにひそやかに日々を送っているように見える。

長州藩士の家に生まれ、明治維新の元勳と呼ばれた山縣有朋、同じく長州藩士を父にもつ日露戦争の英雄と国民的信望を得た、乃木希典大将

を始めとして、現・萩市、長門市一帯からは多くの軍人幹部が輩出している。とりわけ、磯部大尉の生地である旧大津郡斐海村近郊からは、突出して多くの大将、中将、少將の将官クラスを軍に送り出していた。

農地約三反の農家の生まれだった磯部浅一は、幼少の頃から軍人に憧れ、当時、山口県庁に勤務していた松岡喜二郎という篤学の人物の支援によって、広島市(現・広島市中区基町)の陸軍地方幼年学校に留学する。

松岡は折りに触れて、幼年学校時代の磯部に山口県萩市出身の思想家、吉田松陰や高杉晋作の著作やその精神を説いて聞かせ、長州人としての誇りを培(つちか)おうとした。吉田松陰はじめ長州人は、「言」よりも「行」を本分とした。

陸軍幼年学校に入学する生徒の多くは、親族を陸軍高官に持つ者や、裕福な家庭に生まれ育つた子弟が多かったが、磯部は一貧農の子に過ぎなかった。農作は常に獣害や日本海の風雪にさらされ、凶作にうちひしがれる農民の姿を幼い眼で見つめて育つた磯部にとって、防人(さきもり)としての養成機関に身におきながら、特権的な立場をもつ同級生たちに対する嫌悪の思いが、磯部の脳内で培養されていったのかもしれない。陸軍幼年学校を卒業した磯部は陸軍士官学校を経たのち、がっしりとした体格に恵まれ、丸縁の眼鏡の奥に慈愛と勇猛の眼(まなこ)を兼ね備えた、帝国陸軍軍人としての第一歩を踏み出す。

*

二・二六事件で陸軍刑法第二五条「反乱の罪」に問われ、死刑判決を受けた磯部浅一大尉は獄中で「行動記」、「獄中遺書」を執筆した。

磯部に同情的であつた看守らの秘密裏の支援もあつて、これらの著述は秘かに持ち出されて、決起の趣旨が後世に伝えられた。

なかんずく「獄中遺書」には、青年将校らの至誠の大義を容認しなかつた昭和天皇について、磯部は次のように不条理と不信を訴える文章を書き遺している。当時、昭和天皇 裕仁、三六歳。磯部浅一、三二歳。

「(中略) 今の私は怒髪天をつくの怒りにもえています 私は今は陛下をお叱り申し上げるところにまで精神が高まりました だから毎日朝から晩まで陛下をお叱り申しております 天皇陛下 何と云う御失政でありますか (後略)」

獄中にあるにもかかわらず、彼の濁りのない純心と激情、そして当時、神聖にして置すべからざる存在であつた天皇に対する、帝国軍人の言動

として稀有といえる叫びには目を見張らされるものがある。

磯部らと共に刑場の露と消えた北一輝は、その著書「日本改造法案大綱」のなかで、日本は明治維新革命以来、「天皇の独裁国家ではなく」、「重臣の独裁国家でもなく」、「天皇を中心とした近代的民主国」であり、北の言葉によれば「今（事件発生時）の日本は特権的重臣たちと財閥などによる独裁国家」なのだと述べている。

北が描いた大綱のなかにある、普通選挙を実施し、皇室財産を制限し、華族制度を廃し、「天皇を中心とした近代的民主国家」を建設するという概念は、太平洋戦争敗戦後、曲折を経て公布された日本国憲法との驚くほどの相似を感じさせる。

北一輝は銃殺刑にのぞむ瞬間にも、磯部浅一大尉と同様、「天皇陛下万歳」は唱えなかったと伝えられている。

二・二六クーデター未遂事件から五年九ヶ月後、日本は政治の中枢を牛耳る軍上層部のなすがままに太平洋戦争に突入し、一九四五年（昭和二年）八月の惨憺たる敗戦の時を迎えた。

磯部浅一大尉らが処刑された年から数えて日本敗戦の時にいたるまで、日本国内外の戦場における軍兵、民間人の戦死者は実に二百四十万人にのぼった。

磯部浅一には登美子という妻がいた。磯部は二三歳の陸軍中尉として、当時日本が統治していた朝鮮（現 大韓民国）・大邱の部隊に赴任した。

一方、佐賀県出身の父母との間に朝鮮・全羅北道の群山で生まれた登美子は、第一次世界大戦後の恐慌による父親の事業の破産によって、夜逃げ同然に群山から大邱へ一家で移り住んでいた。両親は大邱の町にある料亭の管理人に雇われ、登美子は女学校を退学して、幼い舞妓として酒席に出るようになる。ここで客として隊舎から料亭を訪れた磯部と運命的な出会いがあった。巽（しづけ）も良く、楚々とした振る舞いの登美子。破産者の父を持ち、異国の町を流浪せざるを得なかった登美子に、磯部は同情を越えた恋慕を感じ始めたことだろう。磯部の故郷、山口県斐海村の貧窮する農民達の姿が、登美子と重なったのかもしれない。

十四歳の時から磯部を慕う登美子は、常に磯部に寄り添うように磯部と共にあり、磯部の東京への転任を機に、二人は東京・新宿に小さな所帯を持った。二人のつましい住いは、皇国の理想を談論する軍人たちの溜り場になり、利発な登美子は甲斐甲斐しく来訪者をもてなしていた。

二月二五日、決起の前夜、登美子には
「今夜は遅くなる。先に休め」

とだけ言い残して同志の待つ麻布・歩兵第一連隊隊舎へ赴いた磯部。
今は国家叛逆の大罪人として、監視のなかで限られた時間しか話すこ
とが許されない身の上となった磯部を、登美子は頻繁に代々木の陸軍刑
務所へ面会に訪れた。

一九三七年(昭和十二年)八月十九日、きょうの猛暑を思わせる朝だっ
た。磯部浅一大尉は潔(いさぎよ)く刑場に臨んだ。

その朝、磯部は処刑に立会する刑務所長に一つの願いを申し出ている。
銃殺の刑を受ける際、妻、登美子の黒髪をその手に所持する許しを
請うたのである。

蝉しぐれのなか、複数の銃声が代々木練兵場に響いた。
磯部浅一大尉は、獄中で綴った次の辞世の歌を遺している。

辞世

国民よ国をおもひて狂となり痴となるほどに国を愛せよ



一九九五年(平成七年)四月のある日。あたりを埋め尽くす満開の桜
に圧倒されるようにたたずむ千鳥ヶ淵前の老舗ホテル、「フェアモントホ
テル」一階のティーラウンジで、私はひとりコーヒークップを手にして
いました。辺りの椅子は満員の花見客。

その年一月の阪神淡路大震災、そしてつい十日前には地下鉄「霞ヶ関

駅」ほかでのオウム真理教による無差別大量テロ殺人と、大事件の続く不吉な春でした。

しかし、このホテルの古びて薄暗いティールウンジだけは、春の一瞬だけ出現する空想の部屋のように、花に酔う人々の低音のざわめきだけが絶えることなく続く、幻想の空間でした。

愛好家はフェアモントホテルを「桜のホテル」と呼びます。調度や食器、コースター、備え付けの便箋や封筒にいたるまで、散り行く桜の小さな花びらがあしらわれていました。

桜並木を真正面に見渡せる窓際のカウンター椅子に座って、ぼんやりと桜を見上げながら通り過ぎる雑踏を見送っている私。

さきほどからガラス窓を背にして椅子に佇んでいる老婦人が白いハンカチを手に、何度も何度も窓を振りかえりながら、いとおしむような眼差しで窓外の桜をながめています。

前の月、母を失ったばかりの私は、思い立ってその老婦人に声をかけ、窓際の私の座る椅子に移ることを勧めました。その老婦人は嬉しそうにうなずきました。

しばらく経ってその老婦人は、私に礼を繰り返ししながら、問わず語りに小声で話し始めました。聞けば、ここ千鳥ヶ淵から一時間半もかかる小田急線沿線の自宅から、一人で桜を観にやってきたのだと。

「去年は主人と二人で、ここへ桜を観に来たんです。毎年だったんです。でも今年は私だけ、一人きりになってしまいました。主人は去年、亡くなってしまいました。でも私は、どうしてもここへ来たいと思いついてね。」親切にしてください……主人の分まで今年の桜を私の眼（まなこ）に焼き付けて帰ることができません……………」

老婦人は話し続けました。

「……………そうですかあ、広島のお生まれなんですねえ。私の主人は終戦まで南方で戦った軍人でした。戦後は毎年春になると、二人でこの千鳥ヶ淵へ来て、真つ先に千鳥ヶ淵の戦没者の墓苑へお参りするんです。太平洋戦争で亡くなった、名前すらわからない三十万余りの人たちのご遺骨があそこに納められています。よその国の人に見せるのが恥ずかしいような粗末な造りの墓苑ですが、主人は毎年忘れずに咲いてくれる千鳥ヶ淵の桜が友らへの何よりの供養だと、いつも話していました」

私と老婦人は、ただ隣り合っただけのほんのわずかなひと時に、日本の百年の歴史を語り合ったような印象が残っています。

「あの頃の軍人さんは『惜しまれて散るは桜のほまれかな』って、

よく口にしていました。でもわたくしは、せつかく親木に育ててもらった見事な花なのに、時々の不運な雨や風に追われて、無残に皇居のお濠へ散り落ちていく桜がいとおしく思えてならないんです……あなたのような若い人たちに頑張ってもらって、桜をいつも笑顔で見られる、戦争のない時世が続いてほしいと、いつも思っています……」

一九五一年（昭和二六年）創業の「桜のホテル」、フェアモントホテルは老朽化はなはだしく、多くの人々に惜しまれながら二二年（平成十四年）一月、経営の扉を閉じました。

「千鳥が淵戦没者墓苑」は一九五九年（昭和三四年）に建立され、その後、平成二年、十一年と部分改修を重ねて今日にいたっています。

国立の墓苑としては、「千鳥ヶ淵墓苑」から遅れること二十年、一九七九年（昭和五四年）に建立された沖縄県糸満市摩文仁の「国立戦没者墓苑」とここ、二ヶ所だけになります。



(二) アメリカ合衆国からの手紙

おじさま。

日本から十三時間遅れて、ここアメリカ合衆国にも新しい年がやってきました。ニュージャーシーの自宅でお雑煮を戴きながら、あらためて二年前の広島への旅を回想しています。

おじさまが青年時代を送った場所や、広島の色々なシーンを見せていただきました。ありがとうございます。

私にとっては四度目の「祖国」への旅でした。

まず、広島の大都会の大きさに圧倒されました。アメリカ人が多く抱くイメージだと思いますが、広島「原爆」原爆「破壊、破壊」未発展という、やけにシンプルな公式が頭に浮かびます。

特に、テロリストたちに破壊され尽くした、二一年の9・11ニューヨーク・ワールドトレードセンターの復興が、異常といえるほど時間がかかっているのです、その何十倍、何百倍ものスケールで被害を受けた広島の大惨劇が、そんなに簡単に立ち直れるわけがない、と広島を訪問するまでは考えていたのです。

私も多くのアメリカ人たちと同じイメージを抱いていた、ということ、自分が想像している以上に「日本人」としての血が薄くなり、アメリカの考え方が自分の考え方を支配し始めてしているんだなど、広島に行ったとき実感して悲しくなりました。

でも実際に、広島市は美しい街にみえり、大きな建物がたくさん立ち並び、緑もいっぱいあって、本当に素敵な街でした。

原爆資料館を訪れたとき、見学者の大半は外国人でした。鮮明に憶えているのは、涙をポロポロと流しながら原爆の写真を見つと眺めていた、若い外国人男性の姿です。資料館の中を歩いている間じゅう私も涙ぐんではいましたが、ぐつとこらえていたのに、彼のその姿を見た途端、自分も涙が流れ落ちてしまいました。

なんで人間はこんなにも惨(むご)いことをするのだろう。原爆を落とした人が、原爆を投下することを決定した人達が、きょうこの資料館を訪れるとしたら、私たちと同じように泣けるのでしょうか。それともあの時の決断は間違っていないと、言い張るのでしょうか。涙は流すの

でしょうか。色々なことを疑問に思いました。

アメリカ人である限り、みんなあの原爆資料館を訪れるべきだと思います。自分の心の中で、きっと何かが変わるような気がします。新しい優しさが芽生えると思います。あの悲劇から何かを得ようとしたら、アメリカの人々にしつかりと、自分の体と目で学んでほしいと思いますし、今も変わらずそう思っています。

日本で生まれ育ち、今もアメリカで二人とも異なった職業に就いている両親の長女として、私はアメリカ合衆国ニュージャージー州に生まれました。

いま住んでいる町は、きれいで緑豊かで、それでいてニューヨークシティの繁華街へは気軽に買い物に行ける便利なところにあります。

生まれて数年後、私はひと言の英語も話せないまま、アメリカの私立の幼稚園に放り込まれました。今でも覚えていて「言葉が違う」という混乱。でも決して悲しかったり、怖かったり、悔しいとは思いませんでした。ただ単純に、

「私の知ってる言葉とは違う。みんなと一緒に話したい」と強く思ったのをよく憶えています。

そして幼稚園の終わりには先生に

「あなたはクラスのトップ・リーダー(Reader、朗読者?)ね」と褒められたことを鮮明に憶えています。

これは自慢に聞こえるかもしれませんが、幼い私がどうやってあんなに簡単に、普段家族と話している言葉とはまったく異なる言語を受け入れ、あんなに早いペースで身につけることができたのか、いまだに不思議に思うのです。

しばらく経ってから、文化や言語、宗教の違いというものが、遺跡を小さなシャベルで発掘するように少しずつ見えてきました。

私にとって日本は、近そうでもとても遠い国。大きそうでもとても小さい国。幼い頃は、夏の間一、二ヶ月遊びに行く、東京デイズニールランドや大きなスーパールがあった、おじいちゃんやおばあちゃんに会えて、友達や幼稚園にも会えて、おいしい日本食が食べられる夢のような国でした。けれど今は、前のように夢のような国だとは思わなくなっています。

もちろん大学生になってからは、世界中のどこへ行っても夢の国なんて無いことが解ったこともあります。それだけではなく、年令を重ねれば重ねるほど、日本での自分の居場所が小さくなっていくのを感じて、

日本で過ごす違和感を覚え始めるようになりました。

高校で四年間を過ごした私は、いつのまにか完全に自立していました。両親は日本の地方都市に生まれ育ったので、アメリカの学校のシステムや、大学へ入るために必要なことなど全然わからなくて、一切関わらなかつた記憶があります。私の宿題を手伝ってくれたこともなかつたし、私も親に聞くことは思いませんでした。

私は長女だからお手本がなく、先生や他の友達、そして誰よりも自分を頼りに一生懸命勉強し、志望の大学へ受かることが出来たのです。

それまでの道は本当に長く、最後に達成感があったものの、おそろしいような孤独感も感じました。

自分でやるうと思わない限り、誰も助けしてくれない。親は出来る限りのことはしてくれるけど、ほとんどのことは私みずから手探りで、自分で解決しなければいけない、そういう強い思いが高校の四年間の末に生まれました。

あの高校時代の四年間は、私にとって誇りでもあり、二度と繰り返したくはない悪夢でもあります。でもいま、私は本当に幸運だと思っています。私をそばで注意深く助けてくれた両親や、学校の先生方に心から感謝しています。そしてここまでたどりつけた自分を心から愛しています。



私がいま学んでいる大学は、ハーバード大学やイエール大学などともアイビリーリーグと呼ばれる大学のひとつ、ブラウン大学。ニューヨークシティからは北東へ車で四時間ほど、アメリカ中で最も小さな州であるロードアイランド州の州都・プロヴィデンスという街にあります。

夏は涼しく、しのぎやすいところですが、真冬にはマイナス一度にまで気温が下がります。

ニュージャーシーの自宅を離れて、大学では寮で生活していますが、本当に多種多様な個性をもつ人達に囲まれて生活しています。みんな同じ年なのに、アフリカから来た女友達や、モロッコから来た子、英語・中国語・韓国語・フランス語と四ヶ国語を喋れる子や、みんな人種も育った環境もバラバラで、自分と似た共通性をもつ学生は誰一人としていません。

こんななかで自分の居場所はあるだろうか、と入学したての頃は不安に陥りましたが、みんな優しく、頭が良く、考え方が広い人達なので、短期間で自分自身がものすごく成長した気がします。

ブラウン大学のカリキュラムは独特なんです。普通の大学では所属学部に関係なく、生徒のカリキュラムはある程度大学によって決められてしまっています。

でもブラウン大学は、「オーブン・カリキュラム」といって、大学の指定するカリキュラムがまったくなく、特異な大学です。生徒全員が自分の好きなクラスを、好きなときに取れるという、本当に生徒に対する信頼と尊敬が伝わる方法をとっています。おそらく全米のどこの大学にもこんな例はないと思います。

自由で、そして独立心を育てることを何よりも大切にしている大学だと思っています。

ある日の私と友達との会話です。

「きょう、試験だったんでしょ。どうだった？」

「最悪。絶対おかしと思う。期末試験なのに質問四問しかなかったんだよ！？ あの四問だけで生徒がこの半年間何を学んだかなんて、どうやってわかるのかがまったく理解できない」

「たしかに、で、どうするの？」

「明日先生のオフィス・アワーに行つて、抗議する」

(Office Hour = 教授が生徒だけに取っておく時間。

質問があったり、レクチャーでわからないことがあったり、何かのクレームがあるときにはこの時間に予約なしにいつて、教授の部屋で一対一で気軽に話をする事ができる)

「それでも駄目だったら？」

「他にも不公平だ、つて言ってる生徒もたくさんいるから、みんなの

署名を集めて、嘆願書を書いて教授に渡すわ。だって、ずるいもんはずるいんだもん」

日本の大学で学生達が署名を集めて教授に抗議する、なんてことは考えられないことかもしれませんね。

大学の自由な校風を幸いに、何もせず怠けていたら、その学生は授業料を払いながら、自分の大切な人生の一瞬一瞬を無駄にしているわけですし、自分のこととして、そのことの意味を考えられる学生でないと、大学に籍を置く意味はないということになります。

日本と比べてアメリカの大学は、入るのは難しく、出るのもっと難しい。アルバイトをする暇のない子もたくさんいるし、私なんか勉強やアルバイト、クラブ活動もやっているので、遊ぶ暇なんてまったくありません。それでも毎日自分が成長していくのがわかるのです。一日一日が大切に、特別で、自分が生きていくということを教えてくれます。アメリカや日本の学生たちにも私のこの欲びを伝えたい、わかってくれたい。学校に行けるということ、三食ご飯が食べられるということ、「生きる」ということは権利であるかもしれないけれど、誰もが簡単に得られるものではないことを理解して、心の底から感謝してほしいと思っています。

私は言語や文化に深い関心を持っています。私には日本人の血が流れ、日本とアメリカ、二つの文化と言語の持ち主だからなのかもしれません。自分とはまったく違う世界や環境で生きている人たちの物語を読んだり、聞いたりすると、魅了されてしまいます。自分とは違うものに憧れます。未知の世界に惹（ひ）かれます。

そんな思いもあって、去年からアラビア語を習い始め、去年の夏休みは何週間かモロッコで現地の人からアラビア語を習いながら、一人旅をして過ごしました。

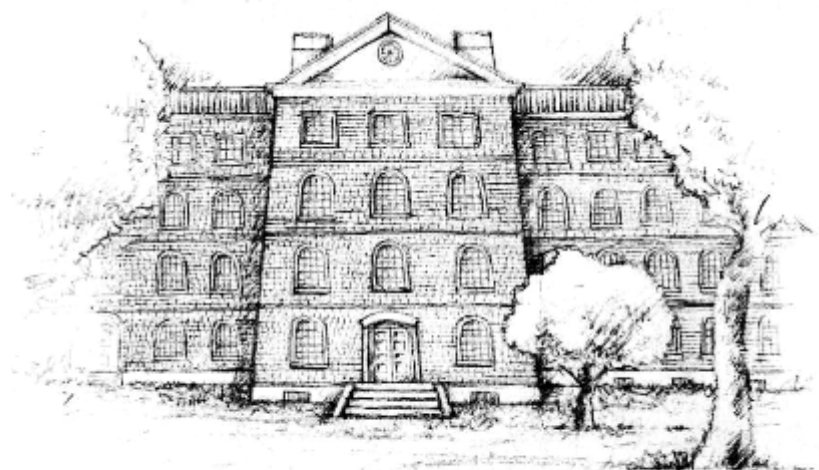
モロッコの首都、ラバットでホームステイをし、英語もフランス語もわからないモロッコ人のお母さんと、私のまだ幼稚なアラビア語、彼女の簡単なフランス語を通して日常を過ごしました。いろいろな人との出会い、そしていろいろな経験。まったく何も知らないことを、自分の目と耳と体で経験するということ。これ以上に私の心を満たすものはありません。

大学では国際関係、とりわけ「世界の治安」を専攻に勉強しています。「世界」という言葉に、そのステージの広さ、関わっている人たちの

圧倒的な数、「世界」のすべてに心が惹かれ、憧（あこが）れます。自分もこの世界の歴史の一部になりたい、何か世界を変えるようなことをしたい、と。将来はアメリカ、日本、そして世界の安全を守るために働きたいと思っています。

いま一番興味を持っていて、将来恐らく向かう方向はテロ対策。アラビア語を習っているのはその理由のひとつです。大学を卒業した後はアメリカ政府のもとで何年か働き、大学院に入ってマスターを取り、また再び世界の安全の確保のために貢献したいと思っています。

大学で多種多様な属性や個性をもつ友達に囲まれながら、私は日本人たちの「日本人」としての思いや誇り、いわゆる自分たちの「アイデンティティ」とは何だと思っているのか、知りたいと思います。日本人は韓国人とはどう違うのか。フランス人とはどう違うのか。中国人とは。特に現代の若い世代の人達の声が聞きたいと思っています。日本に住む純然たる日本人との関わりが少ないために、もしも機会があれば、私と同じ現代の二十代の年頃の人たちの、日本と世界、世界のなかの日本についての考えをじっくり話し合ってみたいと思います。



アメリカという国の素晴らしいさは、表現したいと思うことをいつでも実現できる国であること。他人への気遣いはもちろんありますが、それよりも自分というものと、自分の考え方を大切に作る、というポリシーが多くの人々に共通している考え方だと思います。

中学でも高校でも大学でも、自分の意見を発表することがまず求められます。まず発言すること。意思表示すること。大学に入っても、ほとんどのクラスでは、成績の何割かは「参加点」で決められています。

そしてアメリカは、他のどこよりも「自由」な国。誰か何と言おうとこれだけは否定できません。法的に完全自由、というわけではありません。二十一歳までお酒は飲めませんし、特にニューヨーク・シティへのテロ攻撃以来、治安関係者による国民の電話の盗聴が許されたり、空港での規制がさらに厳重になったり、決して法的に自由だと言っているわけではありません。

反面、アメリカ人から感じることは、言いたいことを言っていない分、表現のマナーに欠けている人が多いこと。日本に行くと、デパートやお店の店員さんの素晴らしいマナーの良さに私は毎回圧倒されて、少し不愉快ささえ感じることもあります。日本からアメリカに戻って、太ったマクドナルドのおばちゃんから、大声で怒鳴られるように注文を聞かれると、なんだか妙に、ほっとします。

でもやっぱり、アメリカ人は日本人から見習うべき多くの点があると思っています。自分を押し殺してでも人に快適な気持ちであってほしいと願う、日本人の精神性の高さやその慎み深さ、デリカシーはアメリカ人には欠けているように感じます。

*

おじさまがお書きになった「千鳥ヶ淵」の章を、とても興味深く読ませていただきました。

私が生まれ育った、愛するアメリカの兵士と、私の両親が生まれ育ち、親戚もたくさんいる国の兵士とが、六十年前、太平洋をはさんで死闘を繰り広げたのです。私のこれまでの生い立ちのなかで私が味わった複雑な思いを、おじさまは理解して下さるでしょうか。

それにこの「千鳥ヶ淵」の物語の背景は、私がいま勉強していることと決して無縁なものではないのです。

最近、大学で中東の歴史を勉強しているのですが、特に興味深かったのは、アメリカで大恐慌が発生した一九二九年（昭和四年）以降、まったく同じ時期に、アメリカ恐慌をきっかけに、レバノンやイラン、エジプト、トルコ共和国をはじめ、中東や北アフリカの国々でも、「二・二六事件」と同じような背景をもつクーデターが次々と発生した歴史があるのです。

もっとも関心をもって調べてみたいと思いますが、そこにはきつと、二・二六事件の時のような青年将校達と、無数の農民兵士達がいたに違いありません。

ヨーロッパや中東の国々、そして日本だけではなく、世界中がそんなにもアメリカによって影響されるのが、やっぱりすごいことだと思いましたが。

でもこのことを、アメリカの国民達はほとんど理解していないと思うのです。

アメリカ合衆国として、「世界という広場」での行動が、どれだけほかの国々を大きく変えていくのか。アメリカの下す決断には、どれだけ大きな重みがあるのか。

アメリカ人たちは自分たちの積極さや精神的な強さを自慢しますが、傲慢（ごうまん）にならず、自分たちの国以外の人々の生活や文化や人生、その国のことをもっと理解しようと努めるべき、と思わざるをえませぬ。アメリカの経済や政治、企業はどんどんグローバル化していくなかにあつて、なぜアメリカ国民ひとりひとりの考え方はグローバル化できないでいるのでしょうか。

ニューヨークの株の暴落に始まった今回の金融危機で仕事を失くした人、就職先が見つからない大学の先輩、いま住んでいる家売ることを決意した人　影響を受けた人たちは私の身近にたくさんいます。テロや自然災害なんかよりも、もっと怖く感じるのはそのせいかもしれません。

ニユースでは毎日貯金や節約の方法などが流れているし、新聞の第一面には必ずその日の経済についての記事が書かれています。私たち学生は、「なんとかなる」と投げやりになつてしまふしかないような状況のなかにいます。

ニユーヨークの街中を歩いていると、「対・不況！　すべて10%オフセール」などと、クリスマスもとくに過ぎたのに、バーゲンセールを続けているお店がたくさんあったり、レストランなどでもドリンクード

ルオフだったり、色々なところで私たちの暮らしが変わってきています。連日のように報道される「イラクで今日爆破テロがありました・・・」と同じように、アメリカの金融危機に関するニュースは、自分たちに大きな関わりがあることにもかかわらず、なんだか無関心を装っていないと、やってられないような気がします。実際、私達一般人にはどうしようも出来ないことです。悲しいことに。

でも、これだけはおじさまにお伝えしたいと思うのです。

不適切な表現だと叱られるかもしれませんが、ある意味、このたびの危機は私にとっては励みになったというか、勇気づけられる思いを抱かせました。ひとつの国や、限られた地域だけの危機ではなく、世界中の国々と市民が共通して抱える切実な課題になつていくからです。すべての国が、その共通する危機の解決のために、すみやかに英知を集めて、行動しなければならぬ世界状況がこれまでであったでしょうか。何かが大きく変わる、天与のチャンスなのかもしれません。楽天家のように安心してしまうのは、直接影響を受けていない私だけなのでしょうか。

*

私は日本の国土に咲く桜を見たことはありません。アメリカに咲く桜の花を見ると、なんだか無性に寂しいような、懐かしいような、くすぐったい気持ちになります。

昔、小学校一年生から六年生の時まで通っていた、週末だけ通う日本語学校の裏庭に、桜の木が二本ありました。当時通っていた頃には、あれは桜の木で、日本のシンボルだということなどまったく知らずに、友達と木登りをして遊んでいました。学校を卒業して何年か経って写真を見ているときに、あれは桜の木だったんだと気がつきました。以来、「さくら」と聞くと、あの小さな裏庭に咲く、桜の木を思い出します。

きっと日本語学校の関係者が、アメリカに住んでも日本人としての精神や誇りを忘れないように願って、学校の庭に植えたのだと今想像しています。

たしかに、日本軍人の精神的支柱になった、「散るは桜のほまれ」、「生き恥をさらさない」というコンセプト、武士の切腹や特攻隊 自分では絶対にやるうとは思いませんし、正しいこととは思っていませんが、アメリカ人の言うように、決して「クレージー」なことだとは思いません。

アメリカでは旧日本軍の「神風特攻隊」を、現在信じられないほどの危害を及ぼしている、中東での自爆テロと比較している人が多いのです。この二つは同じだと言ひ張る人もたくさんいます。なんて浅はかな考え方だろうと悲しくなります。それぞれの国がもつ文化や歴史、取り巻く環境の違いを考えようとはしないで、

「アメリカ人としてのメンタリティー（精神構造や心的な傾向）が、一番正當な考え方なのだ」

と勝手に決めてかかり、他国のもつ文化にその国特有のメンタリティーや誇りがあるということを認識せず、理解せず、敬意も払わず、強引に物事を決めつけるアメリカ人。

日本軍の神風特別攻撃隊の、ちようど私と同じ年頃の若いパイロットたちが、どんな思いで祖国の飛行場を飛び立って行ったことか。

自分の命をみずから絶つことが非論理的なことと言ふのならば、なぜ頭脳明晰な人々が切腹までして、自ら命を絶つという行為に陥（おちい）つたのか。

日本人のメンタリティーをまず受け入れて、深く考えるべきだと思うのです。

亡くなったおばあちゃんから、彼女に届けられたある手紙の話を聞かされたことがあります。

手紙の差出人は、

「今から特攻隊員として出撃して任務を果たす」と、
という別れの言葉を、おばあちゃんに宛てて書き送ったのです。

そのときは「特攻隊」という意味すら解らなかつたのですが、その内容を聞かされて、私は心が揺り動かされたことを今も憶えています。

「二・二六事件」の指導者、磯部浅一大尉が死刑の間際に遣した和歌を何度も繰り返し、声を出して読んでみました。

国民よ国をおもひて狂となり痴となるほどに国を愛せよ

私にはこの歌の裏に隠されているであろう、深い意味はよく理解できません。でも私の体には日本人の血が流れているものの、アメリカに生まれ、アメリカに育つた私は、求められればアメリカ国家と合衆国市民

のために戦う気持ちは出来ています。なぜなら、自ら信じる行動によって愛するものを守りたい、と思うから。

「千鳥ヶ淵」に満開の桜が咲く頃、おじさまが東京への出張の折節にお参りされるといふ、無名戦没者墓苑へ私もお供ができたらいいな、と思っております。今は幻(まぼろし)になってしまった、フェアモントホテルのテイルルームで、アイスクリームを食べられないのはちょっとびり残念ですけど。

おススメの「マリコ」といふ本。明日、紀伊国屋へ行くので探してみます。本を読むのは大好きなんです、私は日本のどんな本を読めばいいのかわからないので、勧めて下さるとすごく嬉しいです。きっと読んでみますね！

お仕事がうまくいきますように、どうかお元気で、またきつとお会いできますように。

January 5, 2009

Rei na Sai ki

玲奈さん

あなたの熱い思いがぎゅっしり詰まった年賀状、ありがとう。

私にとって最も心動かされた、まさしく春の訪れを告げる年賀状でした。一日一日をいとおしみつつ、背筋を「きつ」と伸ばして真摯に生きているあなたの熱い思いを受け取って、本当に頼もしく思いました。

あなたが辿(たど)ってきたこれまでの道のりと、未来への至純の思いは、つい怠情に陥ってしまう私には眩(まばゆ)く映ります。魅惑的なあなたの黒い瞳の奥に、こんなにもたぎるような熱情が隠されていたなんて。私は大学生のあなたから励まされ、叱咤されたようで、日本の古語でいう「恥ずかし」の思いを味わっています。

社員の数が最大で三百人以下、資本金は最大三億円以下と定義される中小企業が全体の九九%を占める日本の企業社会。日本の今の経済状況はもちろん快適なものではありませんが、日々会社で起こる出来事に追われる一方で、世界じゅうを覆(おお)うこのたびの大規模な社会の閉塞に、私もあなたとまったく同様のことを考えていました。

悲観論ばかりが横行するなかで、地球上のあらゆる地域の市民が直面する今の危機は、大きな変革のチャンス、と冷静にとらえている大学生がアメリカの一隅に居ることを知ったことは、私にとって驚きでした。

現実にも日本でも、ここ数ヶ月のうちに、従来では考えられなかったテーマの議論が生まれ、これまで市民が抱いていた固定概念や各種の制度が見直されつつあります。危機が眼前に出現することで、今までは不可能と信じ込んでいたことが可能になり、新しい価値観や視点、危機を克服するための議論が沸き起こっていることを、私は毎日のように発見しています。企業もそのあり方そのものや、ビジネスモデルが大きく変革しようとしていることを感じています。

今回の危機が経済や金融のシステムの見直しだけにとどまらず、地球環境や食糧の確保、そして富の偏在など、我々が直面する他の大きなテーマをも包含する議論に発展してほしいものだと考えています。欲張りな考えでしょうか？

そうした議論と活動によって得られた成果は、パーソナルコンピュータという従来なかった市民の利器によって、ちょうど八十年前のアメリカ

力恐慌とは比較にならない速度で世界じゅうに伝播していき、きつと様々な領域の再生と変化を促すものになると私は信じています。

二年前、あなたと一緒に参りした広島県の宮島・厳島(いづくしま)神社」で、あなたがひいた「おみくじ」の運勢が「凶」と書いてあったこと、憶えていますか？

「大吉」を最良として、「中吉」「小吉」「吉」と続き、「凶」は不吉や災いをあらわす占いなのです。あの時、私はドキッとして、その占いをあなたにどうボジティブに説明しようかと、あわてたことを思い出します。もしもあの「おみくじ」が、今回アメリカが震源となった金融危機を預言するものであったのなら、厳島神社の女神は大変な予知能力をもっていることになりますね。非科学的！とあなたはきっと笑うかもしれません。

実際、現代の日本人は、十二月の数日だけキリスト信者になってクリスマスを祝い、その一週間後には日本の古代からの神社に祈りを捧げ、そのご神託に一喜一憂するヘンテコな国民だということは知っていますよね。今の私も神仏に「祈る」、無数の大衆のなかの一人なのです。



現代の経済や金融、投資のシステムは、我々素人には理解に苦しむ複雑で高度なものに映ります。しかし、よくよく単純に考えてみれば、当り前のことながらそれらはすべて人間みずから構築し、作り上げたもの。そして、その根本にあるのは、人が生まれながら動物として持っている生理機能や本能、感情、欲望、不信などの、「人」そのものに由来しているのだと思いませんか？

重要な立場にある人達が抱く非常に人間くさい不信や、不安や欲望や嫉妬が次々に連鎖し、大きな渦になって市民の社会生活を襲う皮肉な状況が、これまで数限りなく繰り返されてきたのだと思います。

たしかに、今回のアメリカの金融システムの破綻から始まった経済危機は、アメリカの属国に等しい日本にも「The Devilish(悪魔的な)」

としかいいようのないものです。でも、経済そのものが、波の高低こそあれ、常に曲線を描いて律動することは周知の定理でもあります。事業の運営にあたるすべての最終責任者達がそうであったように、私も次々に現れる波を、三十年以上も患急（せ）き切らしてくぐってきた一人なのです。それはとても孤独で骨の折れる作業です。

玲奈さん。学生のあなたにはまだ理解できないことかもしれませんが、私にとって何度目かの逆境の今振り返ってみると、私が現在にいたるまでこうした窮地をくぐるヒントを得たり、前に進む思考の源泉となっているのは、パソコンに流れる情報でもなく、ハウツー本でもなく、少年時代に死別した父親の教えでもありません。

私にとってその源泉となっているのは、百年、千年という気の遠くなるような単位の時間に鍛錬され、今の時代まで消滅することなく生き続けている、古人の編んだ普通の古典でした。そしてもう一つは、私に数え切れないほどの示唆を与えてくれた、国内外の多くの人たちとの予期せぬ出会いだったように、いま考えています。敬愛する彼らの何気ない箴言（しんげん）の一言一言は、東西の古典に語られた「真理」のフレーズとびたりと重なっているように感じているのです。

*

二月初旬、日本外務省の機関のひとつ、国際協力機構（JICA）の援助で、アフリカ地域の国々、ガーナ、ケニア、マダガスカル、マラウイ、モザンビーク、ナイジェリア、南アフリカ共和国、ザンビアの八ヶ国から、祖国の産業振興策全般を立案する政府行政官十一人が、私の会社の食品事業部に研修に訪れます。

アフリカからのゲストをお迎えするのは今回で三度目。これまでお迎えした研修生の母国のほとんどは、国を支えるのがやっとの、貧困やエイズや産業の不毛などの難題を抱えていました。研修生達はマツダの最先端技術の自動車組み立て工場よりも、小さな会社の現場や、その会社の歴史、経営者の肉声に直接触れたい、という強い希望を持っていると聞きました。特に国の将来の発展を担う、アントレプレナー（起業家）への支援が彼らにとっての急務とのこと。JICAの職員は、研修生の二ヶ月にわたる日本での滞在研修に備えて、来日前、研修中、研修後と非常に多様な精緻なプログラムを編成して彼らの研修に備えています。

このたび誕生した、アメリカ合衆国大統領バラク・オバマ氏の実父、

バラク・オバマ・シニア氏は、ケニアの生まれであることは玲奈さんも承知のことと思います。このケニア共和国からも二人の研修員がやってきます。

ケニアは日本の約一・五倍の広さの国土に三千二百万人の人が暮らす、赤道直下の国。総人口のおよそ三十%が首都、ナイロビに集中して住んでおり、首都の周辺には野生動物の楽園にもなっている広大なサバンナが広がっています。国内には四十以上の部族が、それぞれ異なった独自の文化を持って日々の生活を営んでおり、国民一人あたりの年間所得は五四 米ドルほど。コーヒーや紅茶栽培などの農業を中心に、食品加工や石油製品の生産、砂糖の精製などの軽工業を立国の糧とする発展途上の国です。

ケニア共和国は一九六三年(昭和三八年)、国民から「建国の父」と呼ばれるケニアッタ大統領らの戦いによって、イギリス領植民地からの独立を勝ち取りました。

ケニアッタ大統領は生前、こんな興味深い言葉を残しているそうです。

「白人がアフリカにやってきたとき、我々は土地を持ち、彼らは聖書を持っていた。彼らは我々に目を閉じて祈ることを教えた。我々が目を開いたとき、彼らは土地を持ち、われわれは聖書しか持っていなかった」

玲奈さんが手紙のなかに書いている、グローバリズムについての記述との関連を思わざるを得ません。

ケニア共和国政府は昨年策定した、二十年後の中所得国の仲間入りをめざす「ビジョン二〇三〇 計画」を推し進めています。その前提となる毎年二ケタ以上の経済成長率を維持できるか、そして公平な社会発展や民主的な政治システムを持統できるか、が計画成功の鍵を握っているといわれています。厳しい自然と乏しい資本、国民の教育水準などから考えても実現は至難の作業と思われれます。

ケニアからの研修員のひとり、ワウエル・ベンスンさん(三十歳)は、イギリス植民地時代の王立技術大学の流れを汲むナイロビ大学身体科学部を卒業後、ケニア政府産業化省に入省したエリート公務員。

彼が所属する産業開発セクションでは、昔ながらの農業に偏った国内産業を、いかに近代工業化するかに心血を注いでいます。

ワウエルさんは昨年末、私あてに届けられた研修生資料のなかに、

「日本での研修で、ケニアの国情に合った新しい産業の創出や、起業

家精神の育成法などを学んで、ケニアでの持続可能な振興政策を開発したい。そして製品の付加価値化、特許の考え方、研究開発の成果の上手な活用法、ブランド化、下請け制度などの手法を日本から学び帰って、ケニア国民のための産業振興に尽くしたい」

と旺盛な意欲を率直に書いてくれています。

六四年前、原爆によって広島市のすべてが廃墟と化したとき、開発途上の国を含めた世界じゅうの市民から、山ほど多くの援助物資が広島に届けられたことを広島市民は忘れてはいません。今度は私たちがお返しをするときだと思っています。

玲奈さん。あなたと同じように、世界中の青年たちが境遇こそ違え、志を抱いて真正面から難題を直視し、自分の持てる全力を尽くそうとしています。私も、皆さんに負けてなるものか、と思っています。

ワウエルさんの熱意ももった研修の事前資料を読みながら、私はちょうど彼と同じ年頃で、自益を省みず、国の行く末や路頭に迷う庶民を想って兵士達とともに決起し、ついには処刑の銃弾を浴びた「二・二六事件」のリーダー、磯部浅一大尉のことをつい連想してしまったのです。

殊のほか厳しい今年の寒さを凌げば、まもなく日本は南の沖縄から順に桜の花が咲き始めます。

花の満開の頃、きつとまた日本に来てくれて、一緒に東京・千鳥ヶ淵の小径を歩けることを楽しみにしています。

どうかお元気で。 Do your best !

二 九年（平成二十二年）一月二二日

アメリカ合衆国建国以来、初のアフリカ系米国大統領が誕生した日に。

里吉賢司



了

参照文献

- ・ドキュメント 昭和天皇 (田中伸尚著 (株)緑風出版)
- ・天皇裕仁の昭和史 (河原敏明著 (株)文藝春秋)
- ・木戸幸一日記 上巻 (東京大学出版会)
- ・二・二六事件 全検証 (北博昭著 朝日新聞社)
- ・磯部浅一と二・二六事件 わが生涯を焼く (山崎國紀著 河出書房新社)
- ・革命家・北一輝「日本改造法案大綱」と昭和維新 (豊田 稔著 講談社文庫)
- ・日本全史 (講談社)
- ・アフリカ地域中小零細企業支援機関育成コース資料 (JICA独立行政法人国際協力機構 編)

ほか

おじさんの青春日記 その13

著者 里吉賢司

発行者 733 0034

広島市西区南観音町一七番二〇号
株式会社 里吉製作所

電話 (〇八二)二三一・三一〇九(代表)
FAX (〇八二)二九一・三三四九
E-mail ken1221@urban.ne.jp

製本冊子頒価 一〇〇〇円(送料別)

発行 二〇〇九年(平成二十一年)二月一日

「おじさんの青春日記」シリーズ
ホームページアドレス
<http://www.urban.ne.jp/home/ojisan/>